

お茶の習慣と斯波氏の茶園



奥山 秀範
昭和四十五年卒

朝、机にすわり、お茶を一服してから仕事に取り掛かる。これが長い間日本の事務職の習慣であったが、私達がお茶を飲みだしたのはいつごろであろうか。また、越前の人々が最初に口にしたお茶はどのようなものだったのだろうか。

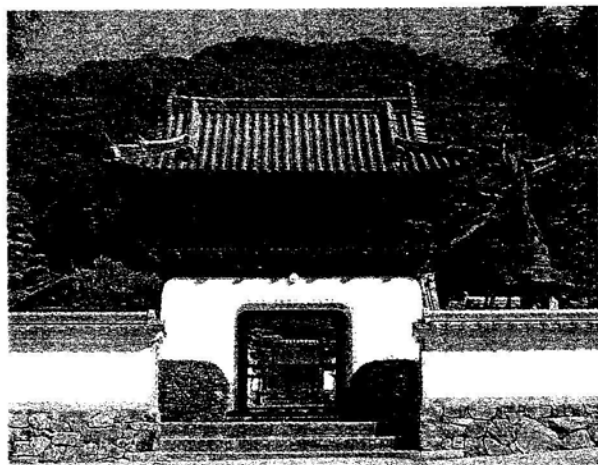
ふとこのようなことを思って先般お茶の産地である宇治を訪ねてみた。

お茶の歴史となると、鎌倉時代初期の栄西禅師と明恵上人の名前が必ずあげられる。建久二年(一一九二)、栄西が二度目の入宋から帰国し、この時茶を持ち帰り、さらに京都梅尾に高山寺を中興した明恵上人に譲られ、上人はこれを梅ノ尾に植え茶園をつくり、さらに茶の効能を認めて、宇治に移し植え、ここから普

及がはじまったとされる。宇治が茶の中心地として発展していく基礎にもなったとされている。

もう一つ茶の普及に貢献したのが、室町幕府と武家政治といわれる。

室町時代に入ると、幕府(花の御所)をはじめ、京の守護の邸宅には、会所が設置され、武家社会での格式礼法がつくられていったが、その中に茶も加わったのである。そして宇治の茶園の大規模な開拓は、三代將軍足利義満と管領斯波義將時代にはじまる。將軍家は「森」・



朝日園跡の興聖寺

「川下」茶園、斯波氏は「朝日」茶園などを開設し、世に言う「宇治七茶園」が成立することとなる。

茶園の開発にあたった斯波氏は、南北朝から室町期に足利本宗家と並んで「第一の家格」を誇った名族で、三管領筆頭として、越前、尾張、遠江の守護職を継承することになるが、根本分国はこの越前であった。その斯波氏の「朝日茶園」は宇治川右岸の朝日山山麓に作られた大規模なもので、ここでつまれた茶が、「武衛陣」といわれた京の斯波氏の邸宅はもちろん、斯波氏の宿老である守護代の甲斐氏や朝倉氏を介して越前の有力国人層にも伝えられたと考えてもそう無理ではないだろう。

斯波氏は戦国期に入って衰退するも、「茶園」はその後も独自に経営されていたが、江戸時代に入って、この地を淀城主の永井尚政が買収して興聖寺を建立したため、茶園の面積は大きく失われた。そして僅かに残っていた茶園も、明治に入り宇治発電所建設に伴って完全に姿を消した。

現在では「御園」といわれた「朝日茶園」の面影はどこにも残っていないが、それでも毎年十月に開催される「宇治茶

祭り」では、「朝日茶園」跡地に建立された興聖寺に運びこまれ、茶事が開催されている。

朝、女子職員が入れてくれたお茶を飲んで、一日の仕事に取り掛かるという習慣は、給茶器の普及と男女共同参画社会の形成に伴い、私の職場でも過去のものとなっており、一抹の寂しさは拭えない。